

2月に休みを利用して、日本に唯一といわれる牛の博物館に行ってきました。予想以上に見ごたえのある展示であり、せっくなので紹介を兼ねてレポートさせていただきます。一見の価値アリです。

### 【関係者であればきっと心ときめく牛の博物館】

皆さんが日々飼養して、まさに生活の礎としている「牛」。その牛を専門的に展示・紹介している博物館が日本に存在しているのをご存知でしょうか？前沢牛で有名な岩手県奥州市前沢にその博物館があります。岩手県の県庁所在地である盛岡市から車で約1時間30分の場所に位置し、近くには世界遺産に登録された平泉や鬼の博物館などといったユニークなスポットもあります。

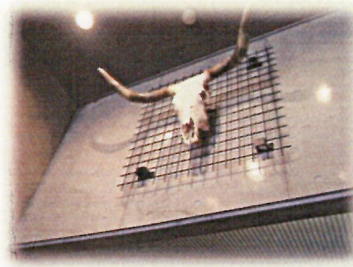


図1. 正面には大きな牛の頭部骨格標本

展示内容としては前沢にあるので、やはり前沢牛の説明や黒毛和牛のはく製など肉牛をメインに紹介している印象を受けました。しかしホルスタインなどの酪農に関係する牛はもちろんのこと、世界各地



図2. トラジャ族の水牛型の霊柩みこし

に存在している牛の種類の紹介や骨格標本なども十分見応える形で展示してありました。非常に興味深かったのは、世界各地の宗教や伝統文化と牛のかかわりを展示していたブースです。そこで特にピックアップされていたのは、インドネシアで独特の伝統と生活様式をもっているトラジャ族と牛とのかかわりを紹介した展示です。簡単に紹介しますと、水牛信仰で知られるトラジャ族の最大のイベントはお葬式です。何年も前からお葬式に備えさまざまな準備をしていくようで、間に合わない人は死んでから10年以上

も経ってお葬式を挙げることもあるようです。お葬式の時に生贄がささげられるのですが、その生贄の中で最も人々が注目する動物が水牛です。これは水牛の価値が高く貴重であることに加え、昔からトラジャ族の人々と労働力としてだけでなくステータスの象徴として深いかかわりを持ってきたことに由来するものだと考えられています。実際に生贄としてささげられた水牛が100頭を超えることもあるそうです。そうして生贄としてささげられた動物たちをお供にして死者は無事に天国へ旅立terとされています。水牛が死者を天国まで運んでいくかのように、棺をおさめる台(霊柩みこし)は水牛がかたどられています。



図3. 昭和中期に活躍した精液輸送を行った伝書鳩の模型

### 【日本における酪農の歴史】

牛の博物館には牛と人の歴史についても掘り下げた内容が展示してありました。その展示を参考にしつつ、自分の勉強もかねて日本における乳牛と人のかかわりについて簡単に説明します。

牛と人類のであいは8000年も前にさかのぼるといわれています(紀元前6～7000年)。我々人類の祖先が野生の牛を捕らえて家畜化したことがはじまりです。6000年前頃にはメソポタミア(現在のイラク・クウェートあたり)で牛乳を利用していたことが、当時の石板に描かれているそうです。「もしも人類が牛を家畜として伴侶に持たなかったなら、人類文化の発展は確実に500年以上は遅れたであろう」

とさえいわれています。日本では約 2500 年前の弥生時代の遺跡から家畜牛の骨が出土しています。アジア大陸で家畜化された牛が渡来人によって伝来したものと考えられています。日本の酪農・乳牛との歴史のはじまりは、飛鳥時代からです。孝徳天皇が牛乳を加工した「蘇」を献上されたと記録が残っており、その頃から日本最古の乳製品である酪・蘇・醍醐(ヨーグルトやバターのようなもの)という



図 4. 1 万 5 千年前にラスコー洞窟に描かれた野牛の写真

ものが作られましたが、当時は食品ではなく薬として利用されていたようです。主に貴族によって乳製品は食されていましたが、仏教の伝来により家畜の食用が禁じられ、この風習は廃れていくことになります。

再び酪農が日の目を浴びるのは江戸時代になってからです。現在の千葉県に日本初といわれる牧場が開かれ、8 代将軍徳川吉宗の時代にインド産の牛を放牧・繁殖しバターを生産していたようです。その後千葉県出身の前田留吉という人がオランダ人から酪農技術を学び、横浜で牛乳の生産を開始したのが日本における酪農

(搾乳牛飼養による牛乳の生産)の幕開けだといわれています。当初酪農は国が主導する事業であり、農家自身によって行われるようになるのは第一次世界大戦前後です。根室における近代酪農の歴史については、黒崎会長が依然執筆したマネジメント情報(2014 年 5 月号)をぜひご覧ください。

博物館の最後には、「道程」で知られる詩人の高村光太郎が書いた「牛」という詩の抜粋が展示してありました。皆さんはこの詩をご存知でしょうか？帰宅後に「牛」という詩の全文を読み、深い感銘を受けました。原文はかなり長い詩ですが、酪農関係者であれば読んでおいて損はないと思います。最後に高村光太郎の「牛」の一部を載せます。興味のある方はぜひ一度原文を読んでみてください。

## 牛

高村光太郎

牛はのろのろと歩く  
牛は野でも山でも道でも川でも  
自分の行きたいところへは  
まっすぐに行く  
牛はただでは飛ばない、ただでは躍らない  
がちり、がちりと  
牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし  
やっぱり牛はのろのろと歩く  
(略)  
牛は非道をしない  
牛はただ為したい事をする  
自然に為したくなることをする ♪

牛は判断をしない  
けれども牛は正直だ  
牛は為したくなって為したことに後悔をしない  
牛の為したことは牛の自信を強くする  
それでもやっぱり牛はのろのろと歩く  
何処までも歩く  
自然を信じ切って  
自然に身を任して  
がちりがちりと自然につつまみ食い込んで  
遅れても、先になっても  
自分の道を自分で行く  
(略)